

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百五十一回 マルクス・レーニン思想の破綻（その一）

南出喜久治（令和6年9月1日記す）

マルクス・レーニン思想（ML思想）は、哲学としての弁証法的唯物論を基礎として歴史学としての史的唯物論に基づき、原始共産制、奴隸制、封建制、資本制、共産制へと生産手段の変化によって段階的に確実に進展するとの歴史的必然性などを説いた仮説です。

これに基づいてロシア革命、東欧革命、中共革命などの暴力革命がなされたとするのですが、その実態はML理論から大きく外れた似て非なる独裁体制を生んだことと同時に、これは以下のとおりの数々の矛盾が明らかとなつて理論的には完全に破綻してゐます。

ところが、理論的に破綻したものであれば、ソ連のやうに早晚崩壊するのですが、依然として中共などが崩壊してゐないのは、理論の誤りを独裁体制を強化することによって維持し、そのためには権力に不都合なすべての情報を隠蔽することしかないです。

ノーベル文学賞を受賞したアレクサンドル・ソルジェニツィンは、「権力は、その力を高めるために、自らを偽装するのである。」と述べました。まさにそのとおりで、権力の偽装は大なり小なりどこの国でもありますが、中共の権力偽装はその最たるものであり、情報隠蔽による愚民政策を続けることしか方法がありません。そして、理論的根拠のない政権の思想は、宗教化することで生き延びることになるのです。

このことは、わが国においても日本共産党も同じであり、党史の改竄を平氣で行つて党员や国民を愚民化することに必死になつてゐます。

以下においては、その詳細を述べることになりますが、今回はその総論として、ML思想の理論的破綻の概要について述べることにします。

1 唯物論の破綻

哲学としての弁証法的唯物論、歴史学としての史的唯物論の基礎となる唯物論は、1774年のラボアジエによって発見され、20世紀初頭のランドルらによって実験的に検証された質量保存の法則に基づいてゐます。

しかし、これはエネルギー保存の法則によって書き換へられました。E=mc²、核爆弾（原

子核反応）によって質量保存の法則とこれに依拠した唯物論は吹き飛んだのです。唯物論は、物質の最小単位であるとされた原子が、これ以上の分解されないことを前提とした唯物論に根差したものでしたが、原子はさらに分解され、極小の素粒子が存在することやそれがエネルギーに転換されることが明らかとなつて根本的な前提が覆されたのです。

これは、物質と非物質であるエネルギーとが相互に転換することを認識できなかつた時代における謬論であり、エネルギーの不認識によるものです。

マルクスは、労働力といふエネルギーを充分に認識できず、物質が労働によって他の物質に「代謝」といふ言葉を用みました。これは、「物質代謝」といふ質量保存の法則のレベルでしか理解することができず、「エネルギー代謝」のことは想像することもできなかつたのです。

これは、唯物論か唯心論といふ哲学的対立以前の問題であり、物質概念の前提が崩壊したこと意味します。

2 歴史観の破綻

弁証法的唯物論に基づく歴史観（唯物論的歴史観、史的唯物論）もまた、唯物論に根差してゐるために、理論的崩壊を余儀なくされました。

生産手段の帰属の変化により、原始共産制、奴隸制、封建制、資本制、共産制へと段階的に必然的に歴史が変化するといふのも、ロシア革命、中共革命、キューバ革命などすべての共産革命には当てはまりませんでした。資本制の段階を飛び越えて、あるいは不完全な状態のままで革命が起こつたことになります。

そもそも、原始共産制なるものは虚構に過ぎません。世界には原始共産制なる社会が存在した事実がなかつたことが明らかですし、一般にこのやうな進展をしたのは、生産手段の帰属の変化によって生じたのではなく、主に人口増大が齎したものに過ぎません。このやうな社会構造の変化が必然的に起きるとすることも空想に過ぎず無理があります。

マルクス・エンゲルスの「共産党宣言」には、強度の累進課税や相続税の導入などを主張したことから、資本主義国はそれにある程度採用して、資産格差、所得格差の是正を図るために、その当時において修正資本主義を導入します。

これによつて、共産革命は結果的に起こりませんでした。これは、資本主義は延命したのか、それとも共産革命が不可能になつたのか、いづれにしても「共産党宣言」はオウン・ゴールだつたのです。

3 貨幣廃止論の破綻

ML 理論は、貨幣が格差増大の元凶であり、物神崇拜による貨幣の弊害を説いて貨幣の廃止を求めてみました。そして、レーニンは、その理論を忠実に実行するために、1919 年テーゼで貨幣の廃止を決定します。しかし、翌 1920 年にそれを撤回します。

このことは何を意味するのでせうか。この方針の撤回の時点で ML 理論は理論的に破綻したことになります。

つまり、大正 6 年（1917 年）の 2 月革命、10 月革命によるロシア革命は、大正 9 年（1920 年）で理論的に崩壊したのです。このことを殆どの者が指摘しないことは不思議なことですが、ML 思想に基づくロシア革命は僅か 3 年で破綻して終はり、その後は理論とは無縁の独裁体制が続いたことになります。

その後はノーメンクラツーラによる寡頭政治が続き、スターリンによる大虐殺を経て、令和 2 年（1991 年）12 月に独裁政権が崩壊したといふことです。

4 国際金融資本主義の不認識

ML 理論は、独占資本といふ概念により、物神崇拜によつて資本自体が資本家を奴隸として独り歩きすることを主張してみました。これ自体は誤りではないのですが、貨幣が商品へと転化して、再び貨幣へと還元されるシステム ($G \rightarrow W \rightarrow G'$) のみを想定して、貨幣が貨幣を生む賭博経済 ($G \rightarrow G' \rightarrow G''$) の猖獗を想像できませんでした。

金融資本主義によつて、世界の食料や通貨や金融派生商品が商品市場、証券市場等に大々的に参入して取引される新自由主義の暴走は、ML 理論では全く認識の射程範囲にはなかつたのです。認識の前提が誤つてゐるために理論として成り立つことはないのです。

また、独占資本といふ個人の私的集団以外に、アメリカなどの覇権国家の影響や国際政治の影響を予測できなかつたことや、世界が東西冷戦構造で対立することの認識も全くなかつたはずです。

しかも、その対立が、共産主義国家と資本主義国家といふ対立ではなく、自由貿易の国際社会では、共産主義国家（ソ連、中共など）が国家単位で「国家資本主義」の担ひ手となり、その他の資本主義国家（アメリカ、西欧、日本など）では各資本家単位で「個人資本主義」の担ひ手となる、いはば資本主義国同士の対立となるとの認識ができなかつたのです。

5 非常時独裁の永続化

革命が完成する過渡的政治形態としてのプロレタリアート独裁（プロ独）といふのは、共産革命が完成すれば消滅し、それと同時に国家も消滅するとされ、プロ独は非常時独裁にすぎないとされてみました。

ところが、これが常態化したことについて、それは革命が完成してゐないためであると

の言ひ訳がなされてきました。

しかし、マックス・ヴェバーなどが説く少数支配の原則からして、独裁による既得権益を有してゐる集団がその権力を投げ出すことはあり得ないです。民主国家においても少数支配の原則は例外なく適用されるのであつて、初めから独裁体制の場合は当然のことです。

日本共産党の民主集中制といふ独裁集中制といふのは、革命前から独裁体制をとるのであつて、革命が起これば、これを全国にさらに徹底するといふことになり、民主主義を全否定する政党が、民主といふ言葉を欺瞞的に使って、「偽装」してゐるのです。

次回からは、この理論的崩壊などについて具体的に説明します。